

「智徳会雑誌」と樋口一葉

山 根 賢 吉

一葉はその晩年に、「智徳会雑誌」の泉谷氏一から小説の執筆を依頼されたが、病状悪化のため和歌八百をもってこれに代えた。それは「智徳会雑誌」第三十一号（明治29年8月15日発行）の夏期附録に、泉谷宛書簡とともに掲載された。これはかつて筑摩書房版「一葉全集 第六卷」（昭和28年11月刊）に「書簡 八十二」として収録されたが、その「解説」によれば、
新生社版樋口一葉全集附録「一葉ふね」第五号に編者小島政二郎氏が泉谷氏一氏の書簡を掲載した中から収録した。
但し誤植は正した。

とある。すなわち、「智徳会雑誌」に発表以後、これが掲載されたのは、新生社版「樋口一葉全集 第一巻」附録「一葉ふね」第五号（昭和17年2月）であり、その誤植訂正に当っては、

恐らく「智徳会雑誌」を参照したと考えられるが、いくつかの点において「智徳会雑誌」掲載のものと相違するところがある。また藤井公明氏の「樋口一葉研究」（昭和56年7月 桜楓社刊）の「明治二十九年の一葉」の「六 最後に」の項にも掲載されているが、これもほぼ同様のことが言える。よって「智徳会雑誌」掲載の全文を次に示すことにした。なお目次には「和歌樋口一葉女史」とある。

○ 一葉女史

家にありては何かとのかれかたき事わき出て、まとまりつきかね申候まゝ、きのふは一日よそに出て、と試み候ひし處何分ねつはげしく候ことゆゑ筆とりて半枚もした、め候ほとにはとく夢中のやうに相成た、打たふれて息

つくやうのさまにこれなりこれをは無理くにつく候
ともいつになりて出来申すへきや我ながらそのほとしれ
かね申候今朝は打ふしきりにて床の中よりこれをは参ら
する事に御座候今さらになりて申上にくきことに候へと
もいかにしてもく出来申さず候のなれは御察し御ゆる
し願度御いひわけ計にふる歌二つ三つ御覧に入れ候毎々
あしをはこはせおきさてかゝる事とも心くるしき限りに
候へとも今御詫のいたしかたなく候たゞ御ゆるし下され
度候 かしこ

口なしの花

なく蝉のこまかしましき木かくれにさく口なしの花もあり
けり

裏屋夏月

たかむしろ子等にしかせてふしまちの月かけ涼しよもきふ
の宿

隣

なかく／＼にまらぬ宿はあし垣のあしきとなりもよしやよ
の中

池夏月

ふく風にかたよる池のうき草のたえま涼しき夏のよの月

夏蝶

ねよりけりたか床夏の花ぞともしらてや蝶の我ものにして

川納涼

すみ田川たかすゝみ舟さす棹のなれぬ手振もおもしろき哉

隣泉

すゝしきも隣の水の音なひはよそのたからのこゝちこそす
れ

閨中扇

手にならす閨の扇の秋かせはおもふ中にもいとほさきりけり
何やらかやら古物ゝとり集めて御はつかしく御取捨よろし

きやうに

夏子

右がその全文であり、「智徳会雜誌」発表のものには、ほとん
ど濁点がなく、句読点は全くない。また和歌はすべて一行書き
である。明治二十九年八月十八日付の泉谷より一葉に宛てた書
簡（樋口悦編「一葉に与へた手紙」二百七十一 昭和18年1月
今日の問題社刊）によれば、

永々御心労相煩はし候雜誌も漸く発行之運に立至り候
則別便にて一部差上申候特に謝罪可仕は玉橋中少々校正粗
漏なる箇所有之右は同母結末之諸部は合僧出遊に迫り為め
に無嫌所他人に相托し候結果何卒不悪御許容被成下度

とあるから、誤植があると考えられる。藤井氏は五行目の「これなり」が「これ有り」の、六行目の「なりて」が「なつて」の誤植ではないかと推測しておられる（前掲「樋口一葉研究」）が、これはいずれも泉谷が「一葉ふね」第五号に紹介したのがそうなので、必ずしも誤植とは断定し得ない。前者はその可能性があるとしても、後者は一葉の原稿でもあれば別だが、意味上の相違もなく誤植とは言いかねるのである。

むしろ、歌の後の「何やらかやら古物、とり集め」の「ゝ」が「の」の誤植と見ることもできる。しかしこういう書き方もあり得たとも言える。ともあれ大きな誤りはないように思われる。

「智徳会雜誌」第三十号（明治29年6月28日発行）の予告に「（智徳会雜誌第卅一号）夏期発兌（明治廿九年七月発行）」の「附録」として、

題未定 小金井 きみ子 女史

「梅 雨」 三宅 花 圃 女史

「ひるがほ」 樋口 一 葉 女史

「緑 日」 田 中 夕 風 女史

とある。こうした女流作家ばかりを並べたのには「文芸倶楽部」の明治二十八年十二月の臨時増刊「閨秀小説」の刺激によるところがあると思われるが、一葉は右のように「ひるがほ」

と題する作品を書く予定だったのである。また一葉自身作品執筆の意欲があったことは、前掲「智徳会雜誌」第三十一号掲載の泉谷宛書簡にも見られるし、「みつの上日記」の明治二十九年七月十五日の条に

おのれはかねてたのまれの智徳会雜誌の原稿か、はやと机に打むかふほとかとに車と、ひる人あり

と、斎藤緑雨の来訪によって、執筆を中断されたことを記しているところからもうかがわれる。翌々日の十七日には、「午後智徳会泉谷氏一君来訪 夏期附ろくのもの催促になりけり」と記している。その後泉谷が七月二十六日にも原稿の催促に立ち寄っていることは事実である（前掲「一葉に与へた手紙」二百七十）。しかし、「智徳会雜誌」第三十一号に掲載された書簡に記されているように、病臥するに至った彼女には、「ひるがほ」執筆は不可能となり、和歌をもって代えざるを得なくなったのである。その和歌は「夏期附録」にふさわしいように、夏の歌を旧作から選び出したものがほとんどである。すなわち、筑摩書房版「樋口一葉全集 第四卷上」（昭和56年12月刊）によれば、「隣」と「夏蝶」は「詠草39」（明治27年4月・8月）の中に、「口なしの花」「池夏月」「川納涼」の三首は、「詠草41 遊歌集「みやぎ野」（明治26年4月・28年12月）の中に、「裏屋

夏月」「隣泉」は「詠草45」（明治28年7月〜8月）の中に、それぞれ見えるもので、いずれも藤井氏の指摘されているように（前掲「樋口一葉研究」）、各詠草の歌の配列から、明治二十七八年の作と考えられる。ただし、「裏屋夏月」は「詠草45」では「茅屋夏月」、「池夏月」は「詠草41」では「夏池月」、「川納涼」は同じく「詠草41」では「夏舟」、「隣泉」は「詠草45」では「隣家泉」と、多少ながら題名に相違があり、和歌も一部、漢字とかなの表記上の異同がある。最後の「閨中扇」は、現在までに公表されている詠草の中には見出すことができず、これのみは新作の可能性がある。

さて、「智徳会雑誌」は、「一葉ふね」第五号に掲載された泉谷氏一の書簡によれば、

智徳会雑誌発行所

東京市赤坂区田町七ノ四、光村利漢方、智徳会

発行兼編輯人 泉谷氏一

明治二十七年一月一日、第一号発行

明治三十一年二月十五日、第四十五号発行

とあるが、創刊号の奥付には、

東京芝区桜川町十四番地寄留

発行兼編輯人 中尾新太郎

東京芝区桜川町十四番地光村方

発行所 智徳会

となっており、泉谷記載のように「東京赤坂区田町七丁目四番地寄留 発行兼編輯人 泉谷氏一」となるのは、第二十七号（明治29年4月6日発行）からである。また創刊号の発行日は「明治二十七年一月三日発行」となっている。もともとこの「三日」という日付は、もともと「一日」と印刷してあるところへ、「二」と印を押して「二三」となるように訂正している。こういう例は他の号にも認められるので、「三日」を正しいとすべきであろう。もともと「智徳会雑誌」は創刊号の「会告」にあるように「本誌ハ毎月一日一回発行ス」とあるが、毎号遅れがらで、第二号は二月二十八日、第三号は三月九日というように、一日発行の原則を立てながら、まあまあである。第四号に至っては五月六日、第五号は五月三十日と、一月に二回発行せざるを得ない場合もあった。

「智徳会雑誌」発行の趣旨は、創刊号の「発行之辞」に、

本会の目的たるや智徳を啓発し徳器を成就し専ら教育勸語の精神を貫徹するにあり（中略）要するに吾人同輩は本会を依て以て上は大詔喚発の徒ならざるを申けり下は社会第二構成者に完全なる準備を与へ以て処世の正鶴に導かん

とす

とあり、第二号の「智徳会規則」の「第二条目的」第一項に、「本会ノ目的ハ智徳ヲ啓養シ専ラ教育勸語ノ精神ヲ貫徹センコトヲ期ス」とあるところから明らかなように、教育勸語の精神を表現すべく「社会第二構成者」すなわち青年たちの智徳を涵養するにあつた。したがつて、創刊頭初は紀行文・詩歌の類を除いて文学、特に小説と関連する記事は見当らない。わずかに「紹介」欄に、新刊文学書類について数行の記事を見るに過ぎなかつた。ところが、明治二十九年に入つて、第二十五号（明治二十九年一月二十三日発行）に、「新年附録」として、

若 菜…………… 漣 山人

鎗持助…………… 乙羽庵主人

北 国 空…………… 泉 鏡 花

の三編を掲載している。「新年附録」という形をとつたのは、「国民之友」の「漢垣草」あたりからヒントを得たものであろう。こうして一旦小説を掲載した「智徳会雑誌」は、第二十九号（明治二十九年五月二十日発行）から「小説」欄を設けるに至っている。しかし小説についての批評の類は、その前年あたりから認められる。その中から一葉に関連あるものを拾えば、先ず第二十二号（明治二十八年十一月三十日発行）の「寄書」欄に、「文壇の

けふこのごろ」と題して「秋光庵」なる者が次のように記している。

「數の爲」か代作なりと騒ぎたる時代より本家本元の田辺龍子は勿論小金井喜美子、若松賤子などいへる女作者一雨毎に頭を擡げ出だし（此間少しの沈静はありたれど）近來に至りては紅葉一手にして其門下より樋口一葉、北田薄水、田中夕風さては稲舟などいへる闊秀作家を一時に、我文壇に推し上げせたり、以來霜枯の文界も一種の刺戟を受け、不意の春風に面喰ふて返り花咲かせ、さてはと速かに襟かき直ほす人もありとかや、中にも一葉女史の「にこりえ」は最も大評判にて暗黒社会の電氣燈を氣取りし処女の癖にあんまりとか又は女性元來詩人に適せずなど、堅くいふもあれど、是はほんの隙かにて、多くは「賞声禁する能はず」と讃め否同情を表し、軽くて「女性の作としては賞すべし」などいへり、而して其中善き所は一生懸命に善い、くなど、なりんぼうと間違えさうに賞め立て（新進作者の奨励法は吾輩首肯す）さてどう庇ふても隠し切れざる大疵は「こは女性なれば強くは処め得じ」との仰き。さるにても手前勝手の批評家連いなどうしても徳なのは婦人方でござる、此間にありて独りホク／＼せるは紅葉先生か、

この筆者は、一葉や稲舟を紅葉門下としているように、文壇の事情に通曉した者とは思われないが、「にぎりえ」の反響を伝える一資料にはなるであろう。さればこそ一葉は「水のうへ」（明治29年1月）の中で、「こそその秋かり初に物しつるにこり江のうわき世にかしましき事よ」と書き記しているのである。

次いで「智徳会雑誌」は第二十六号（明治29年3月13日発行）の「雑録」欄の「佐ま〜」（二）（筆者名は「曉雨」とある）の中で、「二葉女史」と題して、

「濁りえ」が出て、から、文壇は両手を以て女史を迎へたが、先頃「わかれ道」を出して青年秀才作家を踏みつけて、独り着想警拔で怪僻ではなく悲惨、世の不幸者を憐んで同情を運んだ、など、賛められました。それ許りじゃない、鷗外が「めざまし草」で「樋口一葉氏は処女にめづらしき閑歴と観察とを有する人と覺ゆ」と評したら、一方の旗頭高瀬文淵は、お気に障つたと見えて、背筋立て、読売紙上で、其人の経歴云々を云ふなら、君の「舞姫」は、など、真面目に御議論があつた位で、ヒイキをする人が多いから安心して可成は、あんまり常識的に陥り込まない様にして、例の一僻と臭味のある説は止めてほしい。

と「わかれ道」の反響を伝えている。引用の「めざまし草」の文章は、その「まきの一」（明治29年1月発行）の「鷗外戯」の「わかれ道」評の一部である。

こうした「にぎりえ」「わかれ道」の好評によって、泉谷が一葉を訪問したのは、藤井氏の述べられるように（前掲）「樋口一葉研究」で、「智徳会雑誌」第三十号の予告に「ひるがほ」という題名が見える以上、この年の六月頃と推定される。

更に第三十号（明治29年6月28日発行）の「雑録」欄では、「時文漫言」と題して、白藤庵が、

われから「にぎりえ」「たけくらべ」等の詩篇に於て、擬作者の荒略を拉ぎ、批評界の賛辭を一身に集め、現時の文壇は一葉一点張と迄称せらるゝ、女史の作なれども此篇には世間一般感服せずして、ぞろ／＼持前の本音を吹き始め、中には「女史も亦多作の弊に陥らんとす、今にして猛省する所なくんば必ず大なる悔を生ぜん」など、難なき注告をさへなすものあるに至りしは、女史の爲め否寧ろ文界の爲めに歎ずべき至りなり、元來女史の諸作は、脚、筆共に、おぼろ氣を旨とし、而も謠者をして其意の存する所を悟らしむるの巧妙は、蓋し女史以外に需むべからざるも、此篇にありては、其筆跡殊に甚だしく、批評界に於てすら主人公お町の

罪悪有無の問題起りて騒壇の笑話となりし程なれば、普通読者（勿論女史の如きは普通読者と無関係なるべきも）に取りては何等の興味をも与へられざりしは特に遺憾とする所なり。されども実に「めさまし草」の評者の言はれしが如く、出来不出来はいかなる人にもあることなれば、女史たるもの自ら慰藉して幸に文界の爲めに自愛せよ。

ここに記されている「われから」の「おぼろ氣」なる点、「主人公お町の罪悪有無の問題」は、「みつの上日記」明治二十九年五月二十九日の条の斎藤緑雨の質問にも見えるところである。白藤庵は「めさまし草」まきの五（明治29年5月発行）などを通読した上で、右の批判を記したものであるが、これまでの「智徳会雑誌」の一葉評が、ゴシップの寄せ集めの如き感があつたのに対し、一步評論に近づいたものとして注目すべきである。

一葉が和歌八首を発表した「智徳会雑誌」第三十一号の「雑録」欄には、「嘯水閑語(一)」で、「やつこ」なる者が、

一葉女史 批評界の賛辞は、女史が一身に集れる今日、又風替りの批評を聞きぬ、早く云へば「今の小説は重に男女の痴談を写す様だ。其なら女史は甘ひに極まつてるじやないか、女だものあんな事は男より女の方が能く知つて居る

からな。」とは日本の小説批評家の元祖と云はるゝ人の批評なり、吾人は其当否を云はず、只聞込める計りを記すのみ。

またまたゴシップである。同じ「雑録」欄の「時文漫言」で「白藤庵」は、

一葉女史 今の文壇はこの女史なくしては夜の目も明けぬ程の御全盛なり、されば余の人の著作なりせば著にも棒にもかけられずして、先づ片隅におしつけらるべき博文館百科全書のものにても、この女史に編纂といふたいそうなる目釘がつけば堂々たる大文学雑誌も、「こゝにて評すべき筋のものにはあらねど、その著者は一葉なれば余所に見て過さむこと残惜しかるべし」など、難有き前提置きて褒めぬはなく、毎度ながら鷗外漁夫の御引立工合は余所目にも羨ましき程にて、概していへば上手といふ点三割に、女子にはめづらしき何んとやらいふところ三割と都合六割方の徳あるはどうしても女史に限るが如くこれのみにても今の批評家が単に著作者の名に因りて、得手勝手の評を下すの事實は明々白々なり。

と痛烈である。ここに言う「大文学雑誌」とは「めさまし草」で、「こゝにて評すべき筋のもの云々」は、その「まきの六」

(明治29年6月発行)の「鴉翻板」の「通俗書簡文」評の中の一節である。「智徳会雑誌」も同じ三十一号の「紹介」欄で、

『通俗書簡文』 一葉作

われはこの書を雅俗書簡文と改むるの適せるを信ず、実用は兎に角美文としても見るべし、むべなり編輯者が費せる一年の日子かくなりては長からず。

としている。なおこの三十一号の奥付上段の「報告」欄に「新入会員」として、

特別会員 一葉女史 樋口夏子君

とある。同号に一葉が和歌八首を発表したことによって「特別会員」としたものであろう。また同号の「報告」欄に「稟告」として「本号の表紙の文字は一葉女史樋口夏子君の染筆なり」とある。

やがて「智徳会雑誌」第三十四号(明治29年11月21日発行)は、その「時事断片」で、

▲前には若松賤子逝き、今は楳舟女子の毒を仰いで死するに
遇ふ、巾幗の文壇既に二花を失ひ、寂莫禁する能はざるに
当り、一葉女子は重病に罹りて病床に呻吟すと、天何ぞ夫
れ女流文学者に幸せざるや。

と一葉の重病を伝えているが、この雑誌発行の翌々日には、一

葉もまた不知の客となった。

「智徳会雑誌」第三十六号(明治29年12月23日発行)は、「雑録」欄に次のような長文の追悼文を掲載している。

悼樋口夏子君

ゆかりなき人も、君の身まかりぬと聞きては、いといとを
しう、あたらしき心地するに、まして縁浅からぬ吾等は、
たゞ打驚かれて、聞えん方なく、夢ならばさめよかしか
こつ許り、げに朝露の暮をも待たで、風に誘はるゝ命なり
とは、誰が思ひまや。

思へばこの夏のことなりき。おのれ乙羽ぬしのひきあはせ
を得て、初めて君と相見、親しく物語りたるが、その後は
折り／＼訪ひて、夏期附録に何かな小説をものし玉はれと
請ひけるが、今は少し気のすぐれず、筆執るさへ懶ければ
と、歌どもよせ玉ひけるが、固く後の日のよせ文をやくし
おきたれば、それをのみ頼みて、その日をまらちてにのみ
ありしに、あはれ今は空しき望とはなりて、たゞ君が水芭
に悲しき名残を止むるのみ、君の玉の緒今いつこにやどれ
る、あなかなしきかな。

君が万づの道にたど／＼しからず、女流作家の中にも、
一きわすぐれて、めでたかりしは今更なれど、君は唯に文

の美はしきのみならで、心も美はしく、大かたおくふかくしめやかに、重々なる性質にて、はかなきことをも、ゆめたやすくは洩らさず、殊に世を憂きものに思ひなして、ひたすら心を清め、行を謹み、少しもはじけたる様なく、さとりとて又故らに、かまへて、粧ふにもあらず、容をあしらふにもいと懇ろに、何事につけてもこゝろおきなくもてなすに、一度び君と交はりし人は、誰もそを誉めた、へぬ人のなきなるが、そが優しき涙は、殊更に苦しき境に沈める、賤しき者にのみ譏がれたるを見ても、君が心の程はおしはからるれ。

げにも哀しきかな、なか／＼にゑらばぬ宿はあし垣のあしき隣もよしやよの中、と歌ひ玉ひけん文にむかへば、君が面影なほ見ゆる心地すれど、語るよすがもあらずして、咽ぶはたゞ涙なり、我誌は月々にすりいづれど、君か名、君か文は再び見ることは得叶はじ。噫流れ逝きし水はいかにいふとも止まることなく、いかに悲むともかへることなけれど、惜しみて余りある君に、如何なればかくも幸なきにや。

筆とりてむかしを思へば、かなしといふも言葉たらず、折から庭の面わたる秋風に、桐の一葉は吹き散りて、たれが

上をや語るらむ。

筆者名はないが、泉谷の手になるものであろう。一葉の名声を冷笑するかのような文章をいくつか掲載した「智徳会雑誌」も、ここに至って一葉の長逝を心から悼んでいるのである。

一葉が「智徳会雑誌」に発表したのは、わずかに和歌八首と泉谷宛の書簡に過ぎなかったが、「智徳会雑誌」は「にぎりえ」発表以後、たえず一葉の名声や、作品のあるいはゴシップ風にあるいは批判的に眺め続けて来たのであるが、遂に大橋乙羽を介して直接一葉に原稿を依頼することになったのである。一葉も若い泉谷の熱意に動かされて、執筆への意欲はあったものの、時すでに遅く、余命いくばくもなかったのである。しかし一葉生前の最後の作品を発表する舞台となったという意味で、「智徳会雑誌」は記憶せらるべきであらう。

注1 後になって泉谷は新生社版「樋口一葉全集 第四巻」の日記を読んで、同巻の編集者宛書簡で、

「午後、智徳会、泉谷氏一君来訪。夏期附録のもの、催促にたりけり」に出会、大に當時を追憶致候。然るに老生の丸山福山町に訪問したるは午後七時頃なりしが、先客に泉鏡花君と戸川秋骨君在り。共に釣りランブの下にて色々の話出で、今尚記憶に残れるは、鏡花君がお化小説を書くのは、昼間は戸を締めて

眠り、夜になつてから起上り、机に向つて其時分の巻煙草サンライスカ何かを盛んに吹かし部屋中濛々たる中に、やがて或幻影を発見してから夜通し執筆するなりと語り、一葉女史は何か一寸皮肉な評言をせられ候。お邦さんは吾々にお茶を出し下されたり。

と記している。、これが明治二十九年七月十七日の訪問の時のことかどうかは明確でない。それ以前にも訪問している可能性があり、それ以後にも訪問しているからである。

続いて、泉谷は「智徳会雑誌」の発行所などにふれた後、

右発行者・光村利彦氏（本年六十六歳）は神戸の有名なる素人写真家、現在東京大崎にある株式会社光村原色版印刷所相談役に就いて、当時大橋乙羽君と頗る懇意に親友附合を致し居り、同君の紹介にて老生が一葉女史を往訪したる次第に有之候と、大橋乙羽の紹介で一葉を訪問したことを記している（「一葉ふね」第五号）。

なお、「智徳会」の会員に神戸在住者が多いのは、右の光村との関係によるものと思われる。

注² 「一葉ふね」第五号に泉谷は本年六十七歳と記している。「本年」は昭和十七年で、したがって、泉谷が一葉を訪問した頃は、二十一歳だったと考えられる。

（付記）「智徳会雑誌」は国立国会図書館所蔵のものを使用した。